



自由律俳句協会

第3回自由律の泉賞

ゝ句と鑑賞ゝ

第3回 自由律の泉賞

※投句者の互選による上位句

〈第1位〉

送り火の揺らぎを猫と見ている

渡辺 旅人（福岡県）

〈第2位〉

本の付箋の羽化がはじまる

篠原 紀子（神奈川県）

〈第3位〉

次のページを塗っている君のクレヨン

さいとうこう（東京都）

〈特別賞：深田紫洋賞〉

青春の店はまどぎわに座り

湯原 柳泉洞（長野県）

深田紫洋賞について

佐瀬風井梧

深田紫洋 現千葉県旭市に生まれる。大正十年二月二日歿

女そとぬけいでし朝蚊帳の青けれ 紫洋

この句は大正五年一月深田紫洋の句である。短歌にはこうした抒情的な感覚の句は多いが、俳句はこうした句はほとんどみられないものであった。大正の時代、荻原井泉水は、愛や恋は人間にとって自然な感情であるとし、この俳句も立派な俳句と肯定した。時代に生きる人間の自然な感覚感情であれば、囚われることなく、そうした旧来の殻を脱ぎ捨てた自然の表現のこの句は真の意味での俳句だと私も思う。この紫洋の名を冠した特別賞として、抒情的な味わいの深い句に本賞を贈る。

〈入賞〉

古いアルバムめくればみんな死んでいる 青井こおり（埼玉県）

まっすぐな瞳が言った戦争がない国に行きたい

金澤ひろあき（京都府）

帰ってこいと巨木すくつと立つ

原さつき（愛知県）

へたでもなきつづけるしかないうぐいす

松尾貴（山口県）

老人は秘密を誰かに話したくなる

三谷 宜郷（福岡県）

第3回 自由律の泉賞 応募作品詠草集

(作者五十音順、一人二句)

古いアルバムめくればみんな死んでいる

青井こおり(埼玉県)

大人になった子の誕生日を忘れる

遠い山を見る花

あかほり ふき（岐阜県）

駅のホーム、サーカスのうしろ姿

蝶のひらひら私のひらひら白い時間

井尾 良子（北海道）

夕暮の蛍袋戦争は終わったのでしょいか

トンボトンボ 産みというボンド

石川 聡（東京都）

塗り替わり回想電車また消えゆく

核ボタンかかえたままの広島ビジョン

伊藤 哲英（京都府）

腸はきれいだったと報告できる帰り道

またもこげ飯こりない私

植田 博（山口県）

千からびた指おにぎりむすんで昼とする

藤の花房やっど届いた

大岳 次郎（神奈川県）

調髪気に入り何度も鏡をふりかえる

今年もまた花の命がつながる

萩島 架人（福岡県）

ひとりを忘れる喜びどこに置く

まつすぐな瞳が言った戦争がない国に行きたい

金澤ひろあき（京都府）

汗かきは親譲りなんだ一周忌

夏祭り再開進むのは話

木村 浩（埼玉県）

四つ年取り夏祭り準備

昨日の結論今日の結論違って振り子

黒瀬 文子（埼玉県）

鍵穴にクレ5-56注す手忘えのない我が家

小山 榮康（栃木県）

茱萸の実は敗戦の記憶場末は老人ばかり

豌豆芽生う妻は吾子の手のごとく包み

外国からの手紙 カラスと目が合う

権代 祥一（山口県）

せつせと働いた蜂の巣も空っぽの秋

次のページを塗っている君のクレヨン

さいとう こう (東京都)

大花火父の小さくなった影法師

透明だから私の傘だけありません

佐川 智英実 (山口県)

イントロに赤ん坊はマイクをかじる

時煌めく流れの水のウスバカゲロウ

佐瀬 風井梧 (千葉県)

若さ故の高ゲタの音

梅雨明けの一方通行をくぐった

篠原 紀子（神奈川県）

本の付箋の羽化がはじまる

大根ていねいに刻む発表の朝

竹内 朋子（山口県）

せせらぎの響き 初恋のささやき

立髪萎えてライオンが消えた

田中 直心（静岡県）

探し物暗闇に蚊が鳴きながら

ふんふふんと岳人の歌 山靴を干す

ちばつゆこ（静岡県）

思いばかりが先立つ旅する婆ちゃん

引き出しが開かない言葉が出ないよう

富永 鳩山（山口県）

どこで叫べば良いのかこの長いトンネル

吠え続ける深夜の孤独

富永 順子（山口県）

本当は明るい人だと不意を突かれる

教科書と友情を置き忘れて夏

中山 倭文子（福岡県）

山荘の緑蔭に車椅子で待つ

零れる酒彷徨う月の画集

野谷 真治（神奈川県）

ちいちゃい団扇の笑い皺

帰ってこいと巨木すくつと立つ

原 さつき（愛知県）

張りぼての明日なんていらぬ

婿殿に目配せめくばして娘の取説

檜幽可（福岡県）

夕焼けに両手拵げて少し傾いで飛翔

首すじに傷痕ひかる夢のあと

平林吉明（神奈川県）

時間の暗闇に座る共犯者Xとして

選んだのはクリスタルな青空 祈りをあずける

部屋慈音（山口県）

星の海に罪を投げ棄てて眠る

遠くの蟬の声 励まされ今日生きる

増田 壽恵子（山口県）

みな応援 天からチツチツ地からクワークワー

月がぬるんでやっどほどけた春

松尾 貴（山口県）

へたでもなきつづけるしかないうぐいす

ぎっしり袋へ 薬詰め込み 夏の陽へ出る

見崎 厚志（愛知県）

こんな小さな 薬ひとつで 一喜一憂

見えないものを探して一日

三谷 宜郷（福岡県）

老人は秘密を誰かに話したくなる

荷を運んでいる声の大きさに夜明け前

無 一（広島県）

枯れた古井戸の再び湧き出てくる

帰ってきたふる里まつり晴々と花火

山本 説子（山口県）

花火の力強さと優しさもらって明日へ

アクアリウムのタカアシガニがいなくなつた

湯原 柳泉洞（長野県）

青春の店はまどぎわに座り

今ここに満たされてあり／かすかに線香揺れる

渡辺 旅人（福岡県）

送り火の揺らぎを猫と見ている

鑑賞——わたしの特選句

遠い山を見る花

あかほり ふき

▼花は子供達、戦争、病気、飢餓、世界中子供達のおかれている環境は決して幸せに満ちていない。山のむこうの世界は平和で希望に満ちているのだろうか。歩いたり飛んだり出来ない花はただ震えて見ているだけ。もう一つの花は私、そんな子供達に何もしてあげられず、ただ見ているだけ、むなしい。
(井尾 良子)

干からびた指おにぎりむすんで昼とする

植田 博

▼いろんな人生を歩んできた手。ふと一息つく昼ごはんのひとときがじんわりと感じられます。
(見崎 厚志)

調髪気に入り何度も鏡をふりかえる

大岳 次郎

▼素直な絵に勝るものなしである。絵の軽やかなかわいらしさがつい採らせる。軽やかさはリズムからも来ているようだ。特に一度切れた後、後半の部分「何度も鏡をふりかえる」は何度も口ずさみたくなる一句。

(湯原 柳泉洞)

今年もまた花の命がつながる

荻島 架人

▼手入れが出来ない我家の庭の花たちも、それぞれに咲いてくれ私を慰めてくれます。どんな状態になっても負けない植物の逞しさに生きる勇気もらいます。

(増田 壽恵子)

▼花の頃に父を失くしたせい、残りの人生であと何回花を見る事が出来るのかと、ふと思ってしまう。そしてこの句の「花の命のつながり」の祈りの深さを思う。

(金澤 ひろあき)

まっすぐな瞳が言った戦争がない国に行きたい

金澤 ひろあき

▼一番ひかれた句です。

(無 一)

汗かきは親譲りなんだ一周忌

金澤 ひろあき

▼個人的にそう感じた事がありました。もう一周忌ではありませんが共感しました。
(木村浩)

豌豆芽生う妻は吾子の手のごとく包み

小山 榮康

▼7音 11音 3音の計 21音だが語のレイアウトに無駄が無い。7音 vs 11音 + 3音で、モノ（植物） vs 仕草（人間諷詠）の構成。豆の発芽（手のような双葉）を我が子の手の如く両手でつつむ仕草をする妻。すべて状況説明の句だが、吾子、妻、という共感度の高い語を選んでるのでイメージを捉えやすいし、妻を見る作中主体の心持ちまで伝わる。結語の動詞の「つつみ」という継続のニュアンスによって豊かな詩情の余韻の長さを保たせている。心持のよい句である。（石川聡）

外国からの手紙カラスと目が合う

権代 祥一

▼外国の方から、久々の手紙が突然届いた。心に不安・心配が浮かぶ。ふと見上げると、カラスと目が合った。不安はますます上がるばかりである。そんな怖さを感じ

じました。

(田中直心)

次のページを塗っている君のクレヨン

さいとう こう

▼子供が塗り絵に夢中になっていている様子と、次々と新しいことに向かっていることを見守る微笑ましい句です。絵や人生をどんな色に染めていくのか、作者にとつて大いなる楽しみが伝わってきます。

(松尾貴)

▼想像をかきたてられる句。現実からの逃避なのか、願いなのか……。次のページは夢と希望に満ちたものであってほしい。

(原さつき)

大花火父の小さくなった影法師

さいとう こう

▼大輪の花火が大きな音をたて夜空にひろがった。それは大黒柱のお父さんのように頼もしい花火である。時がうつり老いた父と見た大花火は昔のように見事であったが、灯りの父の影法師は丸く小さくなっている。句のその対照の中に人の哀歎が滲み出ている。

(佐瀬風井梧)

透明だから私の傘だけありません

佐川 智英実

▼句としてはまず使わない「だから」が逆に功を奏して、誠に上手です。肩凝らぬ自然な、と思います。

(大岳 次郎)

本の付箋の羽化がはじまる

篠原 紀子

▼付箋を付けたページには日頃の考えと共鳴するところがあったのだろう。そして二つを結びつけると新たな展開が。そんな一文が書けそうな期待。(伊藤哲英)

▼「本の付箋の羽化」が気になった。印象に残る。羽化した付箋は、どうなるのだろうか。

(野谷 真治)

▼歳を重ねると知っている、分かっていると思っていたことにも、ふと「ああ」と気付くことがあります。身体でより深く理解できるようになる時があります。それは血となり肉となつて、ようやくその本質が見えてきている時なのでしょう。付箋をした頁の言葉が永い間心の片隅におありだったのでしよう。羽化がはじまるとの表現で「ああ」と気付かれ、少しずつ本質を体感しておられることの実感が良く伝わってきます。

(渡辺 旅人)

大根ていねいに刻む発表の朝

竹内 朋子

▼緊張をほぐす為か落ち着きを保つ為の願掛けかわかる気がする。(荻島 架人)

立髪萎えてライオンが消えた

田中 直心

▼檻の中で雨に打たれている老ライオンか、または夕日の草原に立つ獅子の幻想なのか。竹内栖鳳の描いた獅子を思わせるような迫力があります。ライオンはなぜ消えてしまったのでしょうか。深い苦悩を感じる句です。(篠原 紀子)

吠え続ける深夜の孤独

富永 順子

▼独居老人の問題について他人ごとではないという社会状況だと強く感じるこのごろです。(あかほり ふき)

零れる酒彷徨う月の画集

野谷 真治

▼ほろよい気分なのでしょう。情景が目には浮かびます。「月の画集」に惹かれました。(富永 順子)

ちいちゃい団扇の笑い皺

野谷 真治

▼恐らく、長く使い込まれた団扇だろうと思いますが、そこにできた皺を笑い皺と表現している作者のポジティブな生き方が見えて、すごくいいなあと思います。た。

(権代 祥一)

帰ってこいと巨木すくつと立つ

原 さつき

▼“心のふる里”安心して旅立つことが出来そうです。巨木に手をかざし繁る緑葉の下に立つ自分が見えました。

(竹内 朋子)

▼帰る場所があると言う心の安心感が巨木の立ち姿と重なりすてきな句だと思います。

(黒瀬 文子)

星の海に罪を投げ棄てて眠る

部屋 慈音

▼人間誰しも長い人生の中で、後悔をする事があります。そんな気持ちをエイヤと遠くへ投げて、明日へと気持ちを切り替える、前向きで心地がいい句です。

(佐川 智英実)

遠くの蟬の声励まされ今日生きる

増田 壽恵子

▼遠くからかすかに聴こえて来る一週間の短い一生を懸命に啼き続ける蟬の声に共鳴する作者の死生観に共感します。近くではなく遠くで啼く蟬の声に人生の過ぎゆく時の長さが暗示され素晴らしいです。

(三谷 宜郷)

月がぬるんでやっどほどけた春

松尾 貴

▼冬場の月に対して寒が緩んでくると、月の見え方の変化を「月がぬるんで」と詠み、近づく春を「やっどほどけた春」と詠んだ非凡さに感服。

(檜 幽可)

へたでもなきつづけるしかないうぐいす

松尾 貴

▼ひらがなだけで書かれているにも関わらず、すっと入ってくるのは自然な文章だからでしょう。うぐいすに喩えています、「くでもくしつづけるしかない」という状況は人生にままあることです。うぐいすを目に浮かべてくすつとすると同時に、いろいろなことには思いを馳せることができる広がりも感じられます。

(青井 こおり)

▼人生も又たやすく変えることはできませんね。すべてひらがなでたどたどしく面白いです。
(富永鳩山)

こんな小さな 薬ひとつで 一喜一憂
見崎 厚志

▼作者の一喜一憂そのままに繰り返される、一字空けが印象に残りました。たった一粒の薬剤が振り子のように作者の心を揺さぶり、その心の隙間が一字空けでうまく表現されていると思います。静謐な句柄で、真に迫るものがあります。

(さいとう こう)

見えないものを探して一日
三谷 宜郷

▼彼は病棟の窓から朝な遊覧船を夕なに漁船を見ては、引揚げ船に妻子を探しに行くと言う。妻子は面会に来てるのに。
(中山 倭文字)

老人は秘密を誰かに話したくなる
三谷 宜郷

▼先の短い命なら、隠し事も話してスッキリしたい。私の父は、亡くなるひと月前

に、それまで絶対に言わなかった、戦争捕虜時代の話を、孫や曾孫との昼食会の時に初めて話しました。「あの頃は辛かったなあ」と遠い彼方を見るような目で！

(ちば つゆこ)

▼老人に限らず人間は秘密が有ると誰かに話したくなるものです。まして高齢になると今まで胸の内に仕舞っておいた大切な思いを生きているうちに誰かに話しておきたくなるものです。人間の真理をについて共感しました。

(平林 吉明)

送り火の揺らぎを猫と見ている

渡辺 旅人

▼送り火の後の寂しいお気持ち伝わってまいります。優しい猫ちゃんと一緒に宜しかったですね。

(山本 説子)

▼送り火、その揺らぎには生前の人々の想い出が湧き出る様が表され、猫は作者の心の平和を表している。穏やかな夕暮れのひと時が美しい。

(部屋 慈音)

▼表現そのままの句で句意が強く胸うつ。

(小山 榮康)

2023年11月26日 初版発行



発行 自由律俳句協会

編集制作 「自由律の泉賞」実行委員会

自由律俳句協会 企画・広報

オンデマンド冊子プロジェクト

自由律俳句協会 事務局

<連絡先> 〒125-0054

東京都葛飾区高砂 2-30-20 グリーンハイツ 202 西藤方

e-mail: jiyurituhaiku@gmail.com

自由律俳句協会

ホームページ：<https://www.自由律.com/>

X (旧ツイッター)：自由律俳句協会@jihaikyo